



星劇団再演プロジェクト

尾道の漁師町、吉和エリアのリサーチを踏まえて展開してきた創作活動「星劇団再演プロジェクト」では、当初、2021年11月の演劇再演のため、招聘アーティスト横谷奈歩を中心に脚本の制作、演劇の練習などをリモート等で行い、私は舞台の設定の構想、大道具の制作などの準備を進めてきたが、新型コロナウイルスの影響で延期を余儀なくされた。

衆楽座について

衆楽座再現のため、戦間期の映画館や大衆劇場の内外装をリサーチし、収集資料をもとに、ドローイングや模型を作り、再度関係者に聞き取りを行うことで劇場内部の空間を推定しドローイングを制作。劇場のスケールを、当時、衆楽座によく通っていた大工の方への聞き取りや敷地の実測調査により明らかにしていった。情報提供者によって劇場の内装についての証言に矛盾があり、1つの模型や図面に集約することは困難だが、そこが個人の記憶の興味深いところでもある。実際に劇場を作ったとすれば、また新たな見解が出てくるだろう。新たな証言を引き出す上でも、この劇場は有効に機能すると考えられる。大掛かりな舞台セットを構築したが、その多くを不要となった廃材で製作できたのも当時の星劇団らしい動きでもある。さらに、このセット吉和小学校に設置予定の資料室の構造にも使われる計画だ。その転用可能性も意識しながら制作を行なった。

脚本と演目の構成

再演の演目については横谷奈歩が当時の劇団の演目の聞き取り調査を踏まえながらも、単なる再現ではなく精神の継承と言う意味で演じ手が各々やってみたい内容を加え、構成を練った。演劇のメインの脚本は尾道市史編纂室の林良司氏、

肥田伊織氏が担当。星劇団誕生の物語を劇団の中心人物、川原やエ子氏の回想や手記の内容を軸に、1946年当時の新聞記事を参照し、終戦直後の世相を描写するものとなっている。その後、脚本構成はリモートでの読み合わせをしながら改変し、最終的には、本学演劇部の長谷川拓己氏が演劇的表現へとアレンジし、より自然な流れの台本へと改稿した。

再演へ

舞台設定や台本などの基本的枠組みは整い、あとは再演に向けての練習や衣装小道具など詰めに入っていこうという矢先に、緊急事態宣言が発令され、対面練習ができない状況が続ぎ、小学生や地域の高齢の方に対して開催を計画していたワークショップも延期することとなった。ワークショップはダムタイプでも活動を行ってきた砂山典子氏(スナッチ)が担当してくれることになり、実際現地を訪問し、漁師町の独特の動作や環境などにインスピレーションを受けたところから振り付けを案出しワークショップを開催してもらう予定である。現在それらを踏まえて再演を来春に予定している。

※本研究は文部科学省科学研究費基盤研究(C)、2021年度尾道市立大学特別研究費の助成を受けたものである。

参考文献

中村昭夫、可児弘明『船に住む漁民たち』、岩波書店、1995
藤森照信『藤森照信のクラシック映画館』、青幻舎、2019

